

学生支援の現場から

◆沖縄大学
学生とともにつくる障がい学生支援

谷口 正厚

(人文学部福祉文化学科教授
学生生活支援委員会副委員長)

沖縄大学は那覇市にある、学生数二二〇〇名(大学院生二〇名)、一学部四学科の小さな大学です。来年一〇月完成をめざして創立五〇周年記念のキャンパス整備を進めています。中庭を囲む全校舎が内部廊下(一部が屋根付きの外廊下)でつながるユニバーサルデザインの新キャンパスは小さな大学ならではの利点です。キャンパスの中心部(一号館)に、学生支援スタッフが常駐する「学生支援室」を設置する予定です(図1)。

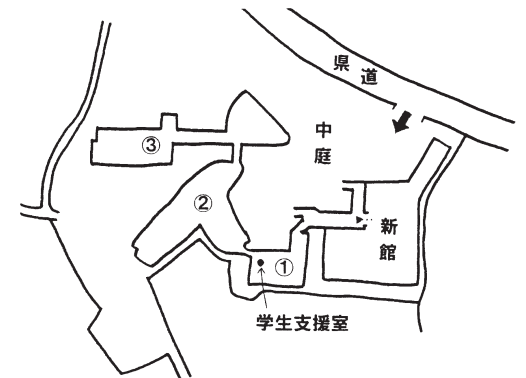


図1 沖縄大学キャンパス(完成後)

学生達は「ボランティアコーディネーターのやっている仕事为重すぎる、教員がやるべきこととは教員がやっただけだ!」と要望しました。教員は学生達の話を聞き、「あなたたちは素晴らしい取り組みをしています。その通りです。すぐに実現します」と約束しました。

△大学と学生の二人三脚で進めたノートテイク
五年前に福祉文化学科で聴覚障がい学生への学生ボランティアによるノートテイク支援を始めて二カ月後、ノートテイク達の要望で教員とのミーティングを開きました。

翌日から学科長が大学に働きかけ、二ヶ月たらずで全学の障がい学生支援委員会が立ち上げられ、一〇月には学生ボランティアに代わって職員のコーディネーターが採用されました。財政的に厳しい小さな大学ですが、学生の力に依拠し、それを支援し、時には学生に批判されつつ、大学がやるべきことをやってきた二人三脚が学生と大学の



写真2 沖縄県5大学聴覚障害学生支援シンポジウム(5大学学生の共催による。2005年10月)

信頼関係を育てました。その中で障がい学生とボランティア学生達の活発な活動が学内外で展開され、二〇〇七年度の特徴GP(Good Practice:すぐれた教育活動)に採用されました(写真2)。

並行して、昨年から今年にかけて、発達障がい学生に対する常勤教員による定期的な相談、講義でのノートテイク支援、学科の教員と支援スタッフとの連絡調整会議、外部の就労支援センターにつないでの支援等を行ってきました。昨年採用されたスクールソーシャルワーカーも大きな役割を果たしています。また、従来からある「ノートテイク講座」等に加えて、今年から「障がい原論」「発達障がい論」「ジヨブコーチ入門」を新設しました。こうした大学の取

△ノートテイクから全ての障がい学生支援へ
今、新たに取り組んでいるのは、発達障がい学生支援です。えいそんくらぶ代表の高山恵子さんを招き「僕らも高校・大学で勉強したい」というタイトルで三月に講演会を開きました。学外からも多くの参加者があり地域との連携の芽ができました。六月には学生を対象とした講演会を開き、一〇月一日には全教職員を対象とした研修を予定しています(写真3)。



写真3 講演会「僕らも高校・大学で勉強したい」(2008年3月1日、沖縄大学)

り組みを反映して発達障がい当事者の周辺から在学生や入試についての相談や情報が寄せられ始めています。今後、全国の先進的な取り組みから学びつつ、沖縄大学独自の取り組みを確立していきたいと思っています。